

それから、年を越し、春が来て、また梅雨の時期を向かえようとしていた。まだ春の名残が残るこの季節は、日陰に入るとさわやかな風が通り抜ける。

利助が受け持つ、最後のゆるを埋め戻す作業が終わり、池の拡張工事は完成した。たえが書いた絵図面とほぼ同じ仕上がりである。

同時進行していた川幅を広げる高松藩の工事も完成して、もう大きな雨でも耐えられる大池となったのだ。

お久米さんの家は、高木村と新田村の境付近に新築されて、今では、たえもそこを仮住まいとしている。

池の完成披露には、藩主の松平頼恭が多くの侍たちを引き連れてやってきた。

寺の境内に宿营地を構え、周囲を白い布で囲い、侍たちがそれを警護しているようだ。

松平頼恭は数人の侍を従えて、大きくなった池の堰堤までやって来た。後藤芝山も、侍の後控えている。

満足げに景色を眺める頼恭が、わざとらしい咳払いをすると、お付きの侍が折たたみ式の椅子を差し出す。その椅子に深々と座り込むと、後藤芝山を呼びつけた。

「芝山よ、国の栄える源はやはり水じやのお。我が高松藩は水を守る知恵者と農民が宝物である」

「御意にございます」  
芝山も広大な池を眺めて満足だった。

「さて、芝山よ、この地の知恵者は誰か」  
「はい、たえと申すため池職人と、それを動かした彦輔と申す百姓にございます」

「ならば、その者をここへ連れてまいれ」  
殿さま一行の最後尾に控えていた二人が呼ばれた。

二人とも地面にひれ伏して、頭を上げることをしてない。

「面を上げよ」  
二人がおもむろに、頭をあげると優しそくに微笑む殿さまの姿があった。

松平頼恭は彦輔に褒美として紋入りの刀を与え、たえには、名字を許すと申された。当時の百姓や職人は、よほどの金持ちか、殿さまに褒められな

い限り名字などもてなかつたのである。しかし、たえは明らかに困惑していた。  
「お殿さま、身に余る光栄に存じます。行方不明の父も喜んでくれていると思います。でも、そのいただいた名字もすぐに必要なくなるのです」  
「たえさん、なにを！」  
あわてて彦輔が小声で制した。

しかし、たえは正面を向き理由を語る。  
「所帯を持つとういうてくれるお方がありまして、それを受けようと思っております。じゃから、すぐに必要なくなるのです」

「ほほう、して、その者は名字を持つておるのか」  
「い、いえ、百姓でしたので……」

「でしたとは、どういうことじゃ」

「百姓を辞めて職人になりたいと申ししております」

「職人？」

「私と同じ、ため池職人でございます」

そこまで聞くと、野暮な彦輔にも誰だかわかる。

利助だ。工事の間、二人は愛を育んでいたのだら

う。びっくりするやら、めでたいやら、たえの顔をあ

らためて見ると、満面の笑みを浮かべて、こちらを見

ていた。

同席していた後藤芝山も彦輔に声をかける。

「水は誰のものか答えはでたか」

彦輔も正面を向いて堂々と答える。

「まだまだ、勉強不足で答えはでません」

「そうか、後の世では水を金で買う時代が来るかも  
知れぬな、その時に誰もがその答えをいえれば、良き  
未来となるであろう」

芝山も大きく成長した彦輔を称えた。

その後、彦輔は名前を柴野栗山と変え、江戸幕府の  
要人となるであろうことを今は誰も知らない。

一方、神五郎池は、中央付近に沈んだお久米さん  
の田畑を忍んで久米の池と呼ばれ、それが久米池と  
いう名になったらしいが、これも定かではない。

(以上6月3日放送分)